

世界仏教文化研究センター
リレーエッセー
コロナ社会で共に生きるために
No. 3

誰にも言いようのない悩みをかかえたとき



応用研究部門長
龍谷大学文学部教授
鍋島直樹

新型コロナウイルス (COVID-19) 感染、または災害や思わぬ事故や病気に遭われ、困難な生活をなさっている方々にお見舞い申し上げます。

どれだけ愛しくても何もできない無力さで悲しくなります。しかし、どんな闇にも必ず光がさしてきます。悲しいとき、仏さまも悲しみ涙を流し幸せを願っておられます。

未知のウイルスに対し治療と感染防止に献身してくださっている医療福祉・行政の方々、日々の生活を支え働いてくださっている方々に感謝申し上げます。

学校の先生や学生は、オンライン授業を通して懸命に学びあっています。言葉の力を信じ、画面や電話を介して、笑顔や声で心を解きほぐしあっています。しかし実際には、パソコンの画面を見つづけるために、目や肩や腰が疲れます。自分の部屋に閉じこもり、孤立しています。面会できない状況で、どうすれば心を通わせることができるのでしょうか。たとえどんなに離れていても、寂しくても、掌を合わせて大切なあなたを想っています。

誰にも言いようのない悩みをかかえたとき、人は何を求めるのでしょうか。

苦しんでいる人が求めているのは、自分の悩みを分析され、立派な答えをもらうことではありません。ライフリンク自殺対策支援センターや東京自殺防止センターで相談員をしている安楽寺の藤澤克己さんは、「相手がうちあ

ける言葉の意味に探りを入れたり、安易に「大丈夫です」と空手形をだしたりするのはなく、ただ寄り添うことが大切です」とおっしゃっています。童謡詩人の金子みすゞさんの作品に、次のような詩があります。

こだまでしょうか

金子みすゞ

「あすぼう」っていうと、
「あすぼう」っていう。
「ばか」っていうと、
「ばか」っていう。
「もうあすばない」って いうと、
「あすばない」っていう。
そうして、あとで、
さみしくなって、
「ごめんね」っていうと、
「ごめんね」っていう。
こだまでしょうか、いいえ、だれでも。

(『金子みすゞ童謡全集』第6巻、149頁、ジュラ出版局)

この詩は何を言おうとしているのでしょうか。自分の気持ちにこだましてくれる人がいるときに、わが身を素直にふりかえり、相手にも優しくなれることを、金子みすゞさんはこの詩で表現しようとしたのでしょうか。うれしい時だけではなく、苦しく悲しい時に、誰かと深くこだましあう、それが生きる力になるということでしょう。

それはまた、私の称えるお念仏が、仏さまの私を心配する声となり、こだまして聞こえてくる体験であります。

甲斐和里子さんの詩に、こう記されています。

泣きながら 御戸を開けば 御仏は
たづうち笑みてわれを見そなわす

(甲斐和里子著『草かご』256頁、百華苑)

ただお念仏を称え、仏さまを呼ぶ私の声が、仏さまの呼び声となって聞こえたのです。何も言えなくても、泣いている彼女を、お仏壇の仏さまが静かに微笑んで見守ってくれたのでしょうか。このように心に悩みをかかえている時には、誰かが深く聞いてくれること、深くこだましてくれることが最も求められることではないでしょうか。

強そうに頑張ってはいても、誰しも弱さや愚かさをもっています。がむしやりに貪り、修羅のような自己に気づいて涙することがあります。

罪の重さに押しつぶされ、謝る言葉さえ失うこともあります。

誰からも愛されずに、孤独で、いっそのこと死んでしまいたいこともあります。

大切なものを喪失したとき、虚しさが広がります。

生きることが苦しいのは、何が本当に大切であるかに気づいたからでしょう。

私たちの社会は、死にたいと思うほど真摯に生きている人たちの苦しみに気づき、自死を通して知る人間のまことの愛情に学ぶ必要があるでしょう。

人は誰しも弱い存在です。

罪を感じて、慚愧するところに、人として生きる道があります。

涙は、深い愛情に気づいた証です。

自らの重い苦しみを知るところに、大悲が満ち満ちてきます。

最も深いあわれみを「大悲」と表現します。

大いなる悲しみこそが、最も深い愛情であるということでしょう。

無明長夜の灯炬なり

智眼くらしとかなしむな

生死大海の船筏なり

罪障おもしとなげかざれ

(『正像末和讃』 (36) 『聖典全書』 2巻 486頁)

「如来の本願が、暗闇を照らすかがり火であり、自分の智慧の眼ではなにも見えないと悲しまなくていい。如来の本願が、苦しみの大海に沈む人を救う船であるから、みずからの罪が重くなげかなくてよい」という内容です。

まどいの眼には見えなくても、光は私を常に照らしています。

どれほど深い罪に沈んでいても、大悲の船が私を乗せてくれます。

あらゆるものが大地に排除されることなく支えられているように、罪や悲しみをいただいたままで仏さまに願われています。

どうか自分をいたわってください。

あなたは、誰と比べる必要もないかけがえのない明かりです。

あなたの苦しみを誰かに打ち明けて、一緒に解決する道を探すことができれば、きっと明日が見えてくるでしょう。

たとえ世間すべてから見捨てられても、仏さまがあなたのそばにいます。

まことの愛情は、どんなに離れていても、目には見えなくても、今この心に満ちています。輝く大切なものは、あなたの中にきっと生きています。

参考文献

竹本了悟・野呂靖「仏教者による自死対策：国際的な課題の共有に向けて」、『2017年度 研究報告書』、龍谷大学アジア仏教文化研究センター、2018
矢崎節夫著『童謡詩人 金子みすゞの生涯』、JULA 出版局、1993
鍋島直樹『自死をみつめて 死と大いなる慈悲』、本願寺出版社、2009

【著者紹介】

鍋島直樹 (なべしまなおき)

専門：真宗学、親鸞の生死観と救済観、ビハーラ活動論

著書：『死別の悲しみと生きる』（本願寺出版社）、『アジャセ王の救い 王舎城悲劇の深層』（方丈堂出版）、“Buddhism, History of Science and Religion”, Naoki NABESHIMA, pp.81-87, J. Wentzel Vrede van

Huyssteen, ed. *Encyclopedia of Science and Religion*, Macmillan Reference, volume 1 and 2, New York, June 2003